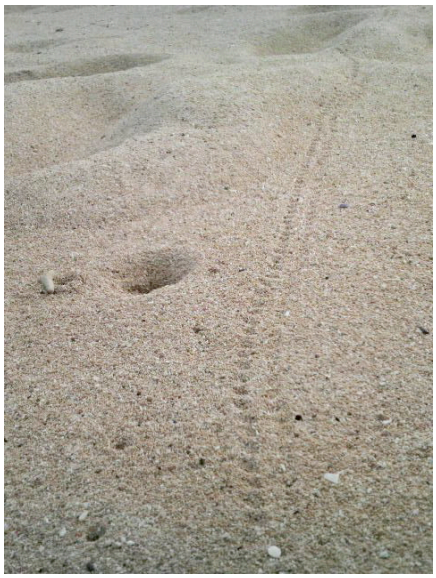
足あと

動物応用科学科　４年　高橋菜里

8 月 15 日、海へ散歩にでかけた。遊泳禁止区域の砂浜は人影も少なく、遠くの海水浴場の賑いが、波音の間に聞こえる。私はサンダルを手に持ち、波打ち際をなぞるように歩いた。犬のウィリーは水が怖いらしく、波をすれすれでかわしながら着いてくる。

ふと後ろを振り返ると、私たちの足あとが長く伸びていた。大きい足あと、小さい足あと。ふらふらと蛇行する、

内またが直りきっていない私の足あと。さっきウィリーが波に襲われて、必死に逃げた足あと。この数分間の私たちが記録されていた。

足あとは、動物の生きた証だ。雪の季節には、真っ白な草原にシカやキツネの生活が記録されている。足あとを辿って、主がどこへ行ったのか、そこで何をしていたのかを推測するのはとても愉しい。化石になった足あとは、太古の時代を、現代の私たちに伝えてくれる。

砂浜についた足あとは、今この瞬間、確かに私たちが生きていたという証。それは誰かが辿るものでも、後代に伝わるものでもない。波が寄せれば消えてしまう記録。地球の歴史に比べれば、私たちの命は、きっと波間の出来事にしか過ぎないのだろう。ああ、なんて短い一生と、世を儚む人もいる。でも私は、その波間に足あとを並べてくれる存在がいることに、心からの幸福を感じた。ずぶ濡れになったウィリーはどう思っているか分からないけれど。